

ボランティア養成セミナー

ー踏み出す一歩、あかぎから新しい自分へー

報 告 書

国立赤城青少年交流の家では「ボランティア養成セミナー～踏み出す一歩、あかぎから新しい自分へ～」を平成26年10月25日（土）～26日（日）の日程で実施した。

本事業はボランティアに興味のある高校生・学生・社会人を対象に、年に2回実施される（今回は2回目）。内容は講義を通して青少年教育の理解や施設の現状をとらえ、実習として野外炊事のプログラムを体験して、その技術を学んだ。また、ワークショップでは施設ボランティアとしての役割を学び、先輩ボランティアと思いを語り合った。最終日には「秋のアウトドアフェスタ」という主催事業を題材としたリスクマネジメントの講座をうけ、野外活動におけるリスクのとらえ方と事故における初期対応について学んだ。

【実施：10月25日（土）～26日（日）】

参加者は高校生が1名、大学生が3名、社会人が5名の計9名で、男女の内訳は男性が7名、女性が2名であった。

<講義：「青少年教育の理解」・「青少年教育施設の運営と現状」

講師：国立赤城青少年交流の家 所長 杉浦 俊之 >



講義は青少年教育についての概論と、全国にある青少年教育施設の歴史的な部分を学んだ。特に「江戸は町が焼け野原になる体験を繰り返してきた。また、第二次世界大戦の敗戦後からわずか20年でオリンピックを開催した。私たちの受け継いできた日本人には『だれかの役に立ちたい』と願うDNAがある。」という言葉に感銘を受ける受講者が多かった。20代前半を中心とした今回の参加者の中には東日本大震災をきっかけにボランティア活動への興味がわいたという人も多く、心に響いたのではないかと感じた。また、講義を通して参加者には「赤ボラ体験調査」というものを実施した。「マッチで火をつけたことがある」という日常的なものから「ハングライダーや気球などで空を飛んだことがある」というダイナミックなものまで、41項目にわたった。自分の体験について当てはまる項目の数を調べることで、自分たちの現状を振り返ると同時に、子どもたちの体験不足を実感するものであった。

<実習：「野外炊事（ピザ作り）」>



作業の行程はボランティアがすべて説明した。デザートピザも作り、交流を深められた。

野外炊事では赤城のプログラムにもなっている「ドラム缶ピザ作り」に挑戦した。作り方の説明や作業の補助はボランティアスタッフが担当して行った。参加者は3班に分かれ、それぞれが協力しながら思い思いのトッピングをしたり、特別注文としてデザートピザにも挑戦したりして、野外炊事を楽しんだ。参加者にとっては味も量も大満足の内容だった。

また、片付けたあとにボランティアが主導で過去のあかボラが作成したオリジナルソングをみんなで歌ったり、交流ゲームを行ったりした。最初は緊張気味だった参加者も徐々に打ち解け、ゲームが終了することには参加者同士も打ち解けたように感じられた。

<講義・ワークショップ：「青少年教育施設とボランティア」「ボランティア活動の意義」>



入浴後は「青少年教育施設とボランティア」について職員による講義を行い、その後「ボランティア活動の意義」についてワークショップ形式で話し合った。参加者がそれぞれ抱く「ボランティア」に対するイメージや思いを確認し、他者と交流し合うことによって、漠然としていたボランティア像を具体化していった。施設ボランティアの役割として「ナナメの関係」や「成長の循環」を話題とした話し合いは大変白熱したものになった。後半はフリートークの時間も設け、参加者と今いる赤城の法人ボランティアとの交流を深める時間となった。参加者のアンケートには「ボランティア活動について、自分自身を見つめ直すよい機会となった」との感想が書かれていた。

<講義・実習：「リスクマネジメントと救急法」

講師：国立赤城青少年交流の家 事業推進室長 高瀬 宏樹>



活動は講義形式でスタートした。実際に野外活動を行う上でどのような怪我や事故が多いのかを学び、それに対してどのような対処が考えられるかといった「リスクマネジメント」の考え方を学んだ。その後、同日に開催されていた「秋のアウトドアフェスタ」のプログラムを体験したり、子どもたちの様子を観察したりすることでリスクの洗い出しを行った。その上で、そこから考えられる最悪の事態を想定し、初期対応としてボランティアがすべきことは何なのかを学んだ。

このプログラムは、運営スタッフとして参加していたボランティアにも参加者として講義を受けてもらった。ふり返りでも「救命救急法や AED の使い方は何度も講習を受けてきたが、このような内容はとても新鮮でためになった。」とか「リスクを知ることや初期対応の大切さを学び、これからの活動にいかせる内容だった。」と大変好評であった。

【事業を終えて】

今回は事業の参加者が9人（15人申込、当日キャンセルが6名）と少人数であった。ただ、参加者は高校生から60代の方と幅が広く、高校生が中心だった5月のセミナーと比べると比較的年齢層も高かった。また地域のボランティア団体での活動実績があったり、社会教育実習生として赤城を経験していたりと、ボランティア活動に対する下地のある参加者が目立った。そこで、ボランティアスタッフにはできるだけ参加者と一緒に活動するように促し、同時に講師には具体的で実際の活動に直結するような内容になるように依頼して、講義やワークショップの内容を組み立てていった。その結果、参加者の事業満足度は高く、参加した9名のうち6名が新規登録となった。

5月の会と同様、今回も数名のボランティアスタッフには企画や運営に直接携わってもらった。ボランティアの思いをくみ取りながら、事業担当者の意図を伝えていくために、スタッフ全員で前泊してミーティングも行った。ボランティア養成セミナーは新規登録者獲得もさることながら、過去にセミナーを受けた現役ボランティアがもう一度、別の講師の話の聞き、自分の知識をブラッシュアップするよい機会となる。また、プログラムの運営を行うことで、人前で話すことが苦手だったボランティアが参加者に指導するなど、OJTの場としてステップアップのよい機会となることを改めて感じた。

担当：企画指導専門職 木暮 敦